

姦通の女

ヨハネによる福音 8:1-11

(そのとき、) イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

説教

きょうの福音は聖書の中ではカッコでくくられています。このカッコの意味するところは、このエピソードはもともとヨハネ福音書にはなかった、後日付け加えられた箇所だという研究成果によるものです。エーッと驚いてしまいますが、これが現在の聖書学の結論です。では、この姦通の女とよばれているエピソードのオリジナルはなどこに記載されていたんだ、という疑問がうまれます。おそらくルカ福音書にあったものが削除され、ヨハネ福音書に

再録されたのだろう、という見解がいまのところ一般的です。

だとすると、先週のルカの福音箇所続きとして読んでみる、こんなこともできそうです。

先週のルカ福音に登場する放蕩息子はじぶんの浅はかな行動を後悔して実家に帰ってきます。すると父は怒るところか大歓迎します。それを見たまじめな兄がプンプンする、そこで父は兄を慰め、諭すというお話でした。

今週は、律法学者たちとファリサイ派の人々が姦通の現行犯で捕らえた女をイエスの前に引き出し、刑の執行（石打による死刑）を迫るところから話が展開します。

罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。（7節）

このイエスの一言で「聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去って」しまいます。そこでイエスもまた女に対して罪に定めない、わたしもまた裁かない、とって女を解放するという話です。

先週と今週の福音の同じところは放蕩息子も姦通の女も兩名共に裁かれない、許されるという点です。男だから、女だからという偏見はありません、福音のイエスのことばは一貫していて、矛盾や男女の差別はありません。しかし全体としては放蕩息子は明るいイメージがあり、姦通の女の方は暗いはなしに感じられます。先々週の「実のならないいちじくの木」のとき北風と太陽の童話をひきましたが、放蕩息子は太陽のゆるし、姦通の女は北風のゆるし、とイメージとしては区別できるかもしれませんが、べつの見方をすれば、差別はないけれど、けっこう聖書は男に甘いのかもしれません。

「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。」石を投げて打ち殺す・・・なんと恐ろしいことでしょう。しかし、よくよく私自身自分の生活を振り返ると“あの人はこんなことを言った、やった。また、こうしなかった・・・。”と、心の中で呟いたり他の人にぼやいたりしている事が沢山あります。地面に転がっている“石”を投げたりはしていませんが心の中で目に見えない石を、

人に向かって投げようとしたことがあります。

「霊性センターせせらぎ、日曜日のみことば」2016.3.13 ホームページから引用

このように、自分は石など投げたことがない、石を投げて打ち殺すという暴力は許せない、と感じる。でも、心の中で目に見えない石を人に向かって投げようとしたことがないか？と自問するとどうでしょう。

ガリラヤの丘でイエスはわたしたちにこう命令しました。

あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。マタイ5:27-28

このイエスの新しい掟を守ることはできるのでしょうか。誰でも心の中で姦淫してはいませんか？そして誰でも心の中で石を投げていませんか。

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。(ヨハネ8:7-9)

もし、この人々の中に姦通の女の夫がいたら、女の息子がいたら、また女の実家の家族、身内のものがいたらどうなっていたのか、身内としての感情をおさえることができたのでしょうか。イエスのことばにははかりしれない力があります。その時は女を罪に定めることなく立ち去った。でもいったん家にもどったらどうなるか。また許せない気持ち、感情がわいて出てくることはないのでしょうか。裁かれなかった女が夫の元へ戻ったとします。夫や家族のものは彼女をどのような気持ちで受け入れることができるのでしょうか。心の中の石をそっと手放し、石を置くことはできるのでしょうか。

あるときイエスは借金のたとえを話されました。1万円の借りを帳消しにされた者と1億円の負債を棒引きにしたもらった者はどちらがより多く感謝の気持ちを持つかというたとえでした。

イエスと二人きりになって残された女はイエスからおことばをいただきます。

わたしもあなたを罪に定めません。(ヨハネ8:11)

そのときの彼女の気持ちをわたしたち他人がおしはかることはできません。誰よりも深くそして多くの感謝の気持ちに満ちていたことを想像することはゆるされるでしょう。また石を置いて立ち去った人たちも、家に戻って怒りが鎮まり、そしてイエスに感謝した人もいることでしょう。

それとは逆に、家に戻ってこの出来事を振り返りまた怒りが湧き出し、イエスに対するしかえしを執念深く狙う人々もいます。福音はそんな執念深い人たちに翻弄されるその後のイエスの道行きを詳しく伝えています。

きょうから四旬節の最後の週がはじまります。わたしたち一人ひとりの心の中にある石を真剣に見つめ、そしてその石をそっと地面に置くことができますように。

(3年前、2016.3.13の説教を採録しました)
